

事業報告書

1. 各事業の状況

【1】 救護施設 大野荘

令和3年度の大野荘の状況は、入所が7名、退所が19名で、年度当初136名いた利用者も年度末においては現員123名と定員を大きく下回ってきている。退所の内訳としては、地域移行者が2名、他施設への措置替えが6名、死亡による退所が11名となり、高齢化の影響が大きい。現在も常時7名前後の入所利用者が入退院を繰り返しており減少傾向が続いている。

利用者の状況は、平均年齢が69歳 年々高齢化・重度化が進み、介護支援も増大している。また、精神障害を抱える人は52%を占めており、入院先から地域社会への復帰が困難な利用者が増加傾向となっていることや触法者や生活困窮者など障害種別が多岐にわたっているため、利用者へのきめ細かな個別支援計画の作成を行い支援にあたってきた。

一時入所事業としては、年間4名の方の利用があった。新型コロナウイルス感染症の影響もありPCR検査を実施して受け入れとなり、このうち2名は入所となった。

自立に向けた居宅生活訓練事業については、昨年に続き男子3名が居宅生活訓練を行っており、8月及び10月にそれぞれ1名が域移行した。現在は新しい利用者2名が入り3名が継続して訓練を行っている。

決算の状況は、事業費は高齢化・重度化が起因となる介護用品費、日用品費などの経費の支出が毎年増額となっているほか、今年度も新型コロナウイルス感染症に関わるマスク、消毒液などの衛生費用品などの保健衛生費が増えている。また、旅行や行事等が予定通りに開催することができなかったことで、教養娯楽費については減額となっている。燃料や電気代の高騰による影響も大きく、価格の精査や購入量の見直し・検討を行うとともに、衛生用品等は県からの補助金を活用しながら利用者の生活に影響が出ないように行っていくきたい。

【2】 障害者支援施設 むつみ園

むつみ園は、12月と1月に1名ずつ死亡退所があり、年度末現在33名の入所利用となっている。入所については、自閉症や強度行動障害の方の入所希望はあるものの、個室等ハード面の整備が難しいこともあり新規の受入ができていない状況である。

利用者の状況は、昭和35年の法人設立当初から施設利用されている方も含め、25年以上在籍されている利用者が約半数を占め、平均年齢が67.5歳と県内の障害関係施設の中でも超高齢化が進んでいる。

障害支援区分は、区分5と6の利用者が8割を占め、車いすや歩行器を利用される方が12名、また半数以上の26名の方がベッドを利用されている。いずれも身体的な介護の必要な方が多く、職員がマンツーマンで介護支援にあたる場面が多くなってきている。そのため生活介護サービスとしては、社会への自立が極めて困難な重度者への支援と身体機能が低下している高齢者への支援の両方が求められ、支援に当たっては利用者と信頼関係を

結びながら施設内での身体保持と介護を中心とした個別支援メニューだけでなく、利用者の日課や情操教育等に取り組めるよう支援にあたってきた。

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、制限のある事業展開となり面会や外出制限を行いながら買い物代行やテイクアウトなどの食事のほか、バスドライブやリモート面会など工夫をしながら生活の潤いを損なうことがないよう努めてきた。

短期入所事業については、男子1名、女子2名、計3名の方が年間を通して利用しており、自立した生活への支援と家族のレスパイトに応えられるよう体制を整えながら受け入れを行った。

日中一時支援事業については、奥越支援学校と連携しながら放課後の利用と長期休暇の利用を合わせて3名の方が利用を行った。

【3】就労継続B型事業所 よもやま

今年度は、定員20名のところ退所者が1名あり、18名の利用者でリサイクル事業、食品加工事業、販売事業、下請事業の4部門の作業活動を行い、それぞれの利用者の就労能力を考慮しながら、就労を通じて自立に向けた作業活動行ってきた。

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響が続いたが、食品加工では板ポン菓子の商品化を行い委託販売の拡充を行ったほか、市からの作業委託や公共施設の清掃・除草作業を積極的に取り組み収益につなげた。12月にはショッピングセンターVIOにてよもやまマルシェの開催や甘栗の実演販売を行った。リサイクル作業については、1月より業者の変更を行ったことで収益増になった。平均工賃は23,289円を配分することができた。

平成20年からはじめた事業であり、現在では半数以上の利用者が60歳代であり作業能力が減退、或いは年齢等が原因となって作業収入の増収に中々つながっていかない。今後は作業種目の変更や、収入効率の高い作業の検討を行い、安定した作業収益を求めたいと考えている。

【4】グループホーム（GH）

グループホームにおいては、高齢化による様々な生活課題が出てきている中、年度当初にホームの縮小の方向性を確認し、それに向け検討してきた一年であった。利用者への説明会を開催したものの、ほとんどの利用者が永くホームでの生活を望まれており、先の暮らしをイメージできずにいるのが現状である。

年度末の利用者の状況は、5ホームで22人が生活しており、ひまわりホームは3名の入居となっている。このままの5ホーム体制で運営していくことは収入面から見ても非常に難しく、次年度中には利用者の意向を尊重しながら生活の場の移行を進め、定員20名の一体的なホームとして再編を行い、安定した運営のもと利用者の地域生活のサポートに努めていきたい。

【5】社会貢献活動事業

社会貢献活動事業としては、大野市からの委託を受けている生活困窮者自立相談支援事業のほか、県内の法人連携によるふく福サポート事業及び、緊急一時受入事業を社会貢献

活動事業として位置づけ、様々な問題を抱えた方々の自立を支援し生活困窮に陥らないよう一体的な支援を実施している。

自立相談支援については、大野市自立相談支援センター「ふらっと」において常勤1名非常勤1名の2名体制で相談員を配置し支援を行ってきた。

相談件数は年間で57件の新規相談があり、プラン策定は14件で次年度への継続支援は62件となっている。相談内容は収入や生活費等の家計に関する相談や失業求職、債務等についての相談が多かった。当支援センターでは、生活の立て直しを図るための家計改善支援事業や就労準備支援事業を合わせて実施しており、今年度は3名の利用があり1名は現在継続して支援

を行っている。さらに法人事業所で行っている認定就労訓練事業に結び付けられるよう体制を整えていきたい。

また、県内の法人連携による生活困難者の総合相談・生活支援事業（ふく福サポート事業）については延べ4件の相談があり食料や水道光熱費などの現物支給を6回行った。

その他、赤い羽根福祉基金の助成を受け体制を整えてきた緊急一時受入事業については、2月で改修工事が終わり事業を実施している。今年度は、7月と11月に1件ずつの利用と3月に大野市福祉課より母子3人、2週間の利用の話があり、受け入れを行った。今後も当法人の地域貢献事業として継続して事業展開していきたい。

2. 施設整備の状況

(1) 大野荘

- ①浴室及びかえで寮の建設 ()
- ②管理棟及びこぶし寮改修工事 (◎)
- ③農耕小屋新設 ()

(2) むつみ園

- ①居室改修工事

(3) よもやま

- ①エアコン設備の改修 (食堂、)

(4) グループホーム

- ①エアコン設備の改修 (うぐいすホーム)